

ハリケーンカトリーナによる被災から復興まで

臨時増刊号(平成十七年十二月)では、ハリケーンカトリーナ災害について主に工学的観点からの現地調査結果を掲載しました。

一方、高潮・高波災害における課題を理解し、教訓としていくためには、「生活者の視点」から見た実態を明らかにすることも重要です。本稿は、自らも被災者でありながら、沿岸災害対策技術調査団の現地案内役として円滑な調査に貢献いただいた、ニューオーリンズ在住で同市公認ガイドのローボック美貴さんに寄稿していただいたものです。

はじめに

一九一五年から五世代にわたるニューオーリンズで暮らす家に私が嫁いだのは、二〇〇〇年の夏のことだった。家は市の中心部からみると北西方向、ボンチャートレイン湖岸に位置するレイクビューという閑静な住宅街だ。昔(一八三〇年から一九五〇年代)はニュー・ベイズン運河が走り、貿易船や蒸気船がアツプタウンから湖までを行き来していたそうだ。運河の突き当たりはウエスト・エンドと呼ばれ、

ホテル、レストラン、ダンス会場、ミュージッククラブ、映画館などもあり、一九二〇年頃までハイソサエティのリゾート地として人気を博し、ジャズのナンバー「ウエスト・エンド・ブルース」も歴史に残る名曲のひとつだ。当時、路面電車や貝殻で敷き詰められた道路も通っており、一九二一年に市は約五〇〇フィートにも及ぶ防波堤を完成させ、便利な郊外の白人の住宅地として発展していった。ニューオーリンズ市の人口は四八万四七四人で、人種的な構成は白人二十八・〇五%、アフリカン・アメリカン六十七・二五%、ネイティブ・アメリカン〇・二〇%、アジア二・二六%、太平洋諸島系〇・二%、その他の人種〇・九三%、混血一・二八%で、一人当たりの収入は一万七二五八ドルで、人口の二十七・九%は貧困線以下に位置する(二〇〇〇年現在の国勢調査)。一七七八年、ミシシッピ川の堤防沿いの高地にフレッチャーターが創設され、他国からの移民も入植し町は発展していき中、不動産価値の安い低地にマイノリティで貧困層の住宅地も自然に形成されていった。他にも多種多様な人種が混

住し、フランス・スペインの植民地、ジャズ、ケイジャン、クレオールなど南部独特の文化が交錯するニューオーリンズは、そのユニークさ故にアメリカ国内でも屈指の観光都市となり、海抜ゼロメートル以下の町として十七世紀から発展してきた。

住民が大移動したハリケーンアイバン

昨年九月十六日にアラバマ州へ上陸したハリケーンアイバンの発生時緯度は北緯九・五度で、北緯十度より以南という低緯度でハリケーンとなった。当時カテゴリー五に成長したアイバンがゆっくりとルイジアナ方向に進路を向けており、郡によって避難勧告及び強制避難命令が発令された。この時ニューオーリンズでは史上初の「車線規制避難」(Contra Flow)が適用され、高速道路のI 10は上下・両車線ともに約十九キロ間にわたって町から郊外へ出る方向のみの通行となった。ニューオーリンズ周辺地域を含めざつと二二〇万人のうち六十万人が避難した「住民大移動」は、想像を絶する渋滞をもたらした。高速道路に

乗るための「正確な入口」が不明確で、国道もかなり混乱していた。また、車線規制が解かれたところから上下線通行に戻り、結局避難車線が一気に半減した。初の車線規制避難に戸惑う人達や、炎天下の中でエンストする車も続出。これが渋滞を悪化させ、通常六時間ほどで行けるテキサス州ヒューストンまで、平均二十時間もかかっている。渋滞と規制区間の出口封鎖によって、高速道路上に平均して約十時間、閉じ込められた状態となり、避難者のストレスは極限に達していた。一方、町に残った周辺人口の半分約六十万人は、「単に避難しなかった人」と「避難できなかった人」に分類できる。中には病気やペットの世話などで避難できずいた人もいるが、単に移動するための「足」がなかった人たちが一番多い層だ。実は一九八八年のハリケーンジョージの時に、この層の人達の避難時の移動について公共バスを使う手段が打ち出されたが、残念ながらアイバンでは施行されなかった。アイバンによる高潮の発生、及び床上浸水などのダメージは市内でも多少確認されたが、予想したほどの大きな被害は少なかった。



車線規制避難の様子

しかし「車線規制避難」は「悪夢の避難劇」と呼ばれ、不明確な誘導、車線規制区間の距離が短すぎたために起きた問題、通信システムのダウン等、体制の不備に非難が集中した。

避難の困難

一言で「避難」といってもその容易ではない。毎回ハリケーンが来るたび、四日も五日も前に余裕を持って避難できればいいのだが、仕事のことや避難の経費、そしてその労力を十分持てる人がどれだけののだろうか。博打のようだが、ハリケーンの予先をぎりぎりまで見極めてから行動する人が実際は圧倒的に多い。結局、「一斉移動」に近い状態になり、当然渋滞も始まり、避難エリアのホテルもすぐに満室になる。それも近郊のホテルから満室になるので、例えば、本来はバトンルージュ（ニューオーリンズから約一三〇km）に避難したいところだが、部屋が取れないため、さらに約四三〇km先のヒューストンや、約七三km先のダラス等へと逃げる羽目となる。一日中渋滞の中を運転し、ホテルに泊まり、何事もなければ数日で帰宅するが、その際のガソリン代、ホテル代、その他の経費はもろろ自己負担だ。単に「車がないから避難できない」だけでなく、車を持っている中流階級以上の家庭にとってもこれは痛い出

費となる。ましてや、アイバンのような「過酷」な避難体験を持つ者にとっては、尚更フットワーク軽く避難する気にはなれないものだ。

住民の意識

ニューオーリンズ市の面積は三五〇・二平方マイル、このうち四十八・四五%が水地域だ。創設以来、水害に悩まされており、水害を避けるため、墓地のほとんどが地下への土葬ではなく、地上に埋葬室を設け、その中に葬るスタイルをとっている。この土地柄を表す墓地も、ニューオーリンズを代表する観光スポットのひとつだ。住民は、常に水害を意識しながら生活をしている。毎年ハリケーンシーズンには、町のどこかで高潮被害による「床上浸水」が報告されており、ハリケーンが来れば当然水害も免れないことを住民はよく理解している。しかし、水害の規模としては「床上浸水」が最悪



ニューオーリンズの墓地

のケースと考えている人が多く、ハリケーンが来ると暴風災害防止のため、窓を板で覆い、水害に備えて大事なものをクローゼットの上や二階などに上げて避難する。レイクビューで生涯を過ごしている姑夫婦も一度も浸水の水害を経験がない。

カトリーナの避難前

今年は何年以上にハリケーンシーズンの到来が早く頻度も増していた。八月二十五日、十一番目の熱帯性暴風「カトリーナ」がハリケーンとなりフロリダ州に上陸、その後メキシコ湾へ抜けた。ローカルニュースも頻繁にハリケーンの予想経路を伝え、非常時に水や食料の確保などを訴え始めた。ちょうど家の庭を訴え始めた。ちょうど家の庭先が17thストリート運河で、その堤防から水位を見たがいつもと変らなかつた。上陸二日前の二十七日には郡によっては強制避難命令が発令され、夕方四時には史上二回目の「車線規制避難」が敷かれた。ガソリンが売れ切れるところも出てきた。スーパーの水もほとんど売れ切れ、私達も水とガソリンの確保に苦勞した。私達もいつ避難すべきか迷ったが、隣近所の人達には全く逃げる様子は無かった。この日の夜、仕事を終えて帰ってきた夫と相談し、二十八日早朝四時に急遽避難することを決め

た。カテゴリー五のカトリーナが、着実にニューオーリンズに進路を向けていたのだ。なんとなくいつもと違う深刻さを感じた。万が一の水害に備えて、ざっと一階から運べるものを二階のフロアに置いた。この時は、またいつも通り二三日で帰宅できると思っていたので、スーツケース一つに数日分の洋服だけを入れて家を後にした。

八月二十八日早朝・避難

インターネットで宿泊先を唯一予約ができたのはヒューストン郊外のモートルだった。通常は六時間の距離だが、渋滞は覚悟していた。ニュースで、車線規制「避難」の情報を確認し、「バトンルージュを経由し、北西へ向かうなら一番左の車線に入る」と確認し、高速へ向かった。朝五時前だったが、すでに高速道路の入口から渋滞しており、苦勞して「通常」の北西に向かう入り口から（高速に）乗った。そして一番左の車線を走った。しかし、これは間違いだったのだ。「一番左」というのは実は反対車線のことと、その反対車線に乗るためには数力所のポイントから乗らねばならなかつたことを後から知る。私達の車線は途中から強制的に北向きのI-55に変わり、結局、北に直進するしかなかった。途中のガソリンスタンドで、私達と同様「車線規制避難」のため、目

的地から大きくそれてしまい、道に迷った。たぐさんの避難者達が地図を広げていた。「正しい目的地へ行くまでの正しい入口」は逃してしまったものの、想像していたほど苛酷な渋滞はなかった。私達は結局十五時間かけてヒューストン郊外へ到着した。もし高速への入口を間違えていなければ、たらあと三、四時間早く着いていたはずなので、アイバンの平均避難時間二十時間に比べれば、大きく改正されたプログラムがとても有効だったと感じた。しかし、問題はホテルだった。予約確認書とともにチェックインをしたが、なんと予約は取れていないと断られた。その時、すでにインターネットの予約システム自体が混乱しており、各所でダブルブッキングや架空の予約が相次いでいた。各ホテルや公衆電話前は私達と同様、宿泊先のない避難者達で溢れかえっていた。幸い私達は、なんとか町外れのモーテルに部屋を取る事ができた。この日の午前九時三十分、レイ・ナギン市長は史上初の市内完全避難命令を発令した。同時に市内各所に集まる逃げ遅れた市民を避難所へ運ぶために、公共交通機関のRTAにバスを出すよう指令も出した。

八月二十九日カトリーナ上陸 通信システムのダウン

カトリーナの上陸から、その後被害などが徐々にニューースで

伝えられていく中、携帯電話や二ユーオリンスの市外局番の電話番号が全くつながらなくなった。姑夫婦が避難したルイジアナの北部の親戚宅は、海抜より約十メートル高いところではあったが、家は木造だったため、暴風による被害をとて心配していた。全ての親戚や友人達の消息も不明だった。とにかく一心不乱に心当たりの番号を指に肉刺ができるまで回すが、回線が混線しており全く電話の通じない状態が三、四日続いた。不安でどうしようもない長い日々だった。しかし、被災から四日目に姑からテキストメール（限られた文字だけを転送できる携帯電話の機能）が届き、やっと彼らの安全が確認することができた。実はこの時始めてテキストメールがどの携帯電話からも交換できることを知る。以降も電話は繋がりにくいが、このテキストメールは非常に有効で、唯一連絡が取れる方法だった。その後電子メールでの連絡も取り始めるが、移動中やパソコンが使える環境にない人も多く、家族同士でも連絡を取るのが極端に困難であった。

精神的な葛藤

当時のニューースで17ホストリート運河脇の家は濁流に飲まれ倒壊したと聞いた。町の八割が水没し、屋根で助けを求める人々

の映像を目にした時、次々と近所の人たちが連絡のつかない親戚達の顔を思い出し非常に感情的な日々を過ごした。そして家も仕事も将来の計画も全て失くしてしまった現実を受け止めねばならなかった。私はニューオリンスへ移住して間もなく市の公認ガイドとなり、ツアーガイドとして働いていた。街を知るにつれ、よりニューオリンスに魅了され、「これぞ天職！」と思今年二月に日本人向けのディスプレイネーション・マネージメントの会社を設立したばかりだった。業績も好調で、思い切った会社用の大きなバンを購入したのはカトリーナ上陸の四日前のことだった。夫はジャズ・ミュージシャンでツーリストが集うバーボン通りでよく演奏をしていた。私達の暮らした街へのツーリストあつてのものだった。連日ニューースでは冠水した住宅地に浮かぶ遺体、悪化する治安と避難所の衛生問題、平均最高気温約三十八度の真夏の炎天下の中、飲料水さえ何日も届かず、衰弱していく人々や放置された遺体なども映し出された。奪略の様子も見たが、ブランド品や電化製品を盗み出しているのは論外だが、あの状況下で水や食料、子供のオムツなどを盗み出す人については正直、仕方ないじゃないかと感じた。同じアメリカ国内にいながら州兵配給部隊によって食料と飲料水が町に残った

被災者に配られたのは、九月二日、被災から五日目のことだった。なぜ、救援や物資の支援がこれほど遅れたのか理解できないが、先進国のアメリカにいながら自然災害が人災へと転ずるなんて夢にも思わなかった。絶望感、矛先のない怒り、憤りが交じり合い私達は日々痛嘆するしかなかった。私達は被災から六日目、メンフィスを経由してシカゴの義兄宅へ向かうことになった。そこで姑夫婦と合流することにもなった。途中、高速道路でルイジアナのナンパレートをつけた車を何度も見かけた。車内で泣き喚いている人も多く、それぞれ行き先を求めて彷徨っているようだった。その時、多数のパトロール・カーなどに先導された電線作業車や小型のボートを乗せたトラック、救急車、簡易シャワー運搬車、簡易トイレ運搬車など数百台のトラックとすれ違った。実際に被災地へ救援隊が向かっているのを目にしたのはこの時が始めてで、絶望のどん底からにわか希望が湧いてきた瞬間だった。

住民のボランティア

シカゴ郊外へ到着したのは被災から七日目のことだった。ルイジアナ州西部の避難先から三日間かけて一五〇〇キロを運転してきた七十六歳の姑夫婦とも



浸水しているレイクビューの様子 (印が筆者の家)

再会した。多くの被災者は私達と同様、すぐに帰宅できると思い最小限の荷物か、着の身着的ままで逃げていた。ところが、翌日に玄関を開けて仰天した。大きな箱が五、六個山積みになっていたのだ。中には近所の方のご好意で届けられた洋服やタオル、洗面用具、子供のおもちゃ、ギフト券などが入っていた。この時に始まり、連日三、四回ドアのチャイムが鳴った。近所中で押入れの中から私達に必要なものを探してきては運んでくれた。お陰で毎日洗濯をしながらも十分着替えられるようになった。ある時は八歳と十二歳の兄弟が豚の貯金箱から二十ドルと十二セントを息子のために持ってきてくれた。ある時は近所の方が当番して夕食まで運んで下さった。私達は翌週別の親戚の空き家を借りることにになり移動したが、そこでも布団や食器、食料、ギフト券、夫が練習に使えるようにと電子ピアノまで寄付していただいた。町中ではいたるところで募金が行われ、週末には街角で子供達が洗濯活動を行い、そのお代がカトリ

ーナ被災者のために送られていた。また息子が編入した幼稚園からは学校に必要な一式のほか、新しい洗濯機まで寄付していただいた。しかも校長先生が土曜日の休日にその洗濯機を接続しに家まで来て下さった。他にも教会の方々がたくさん立ち寄って下さり、様々な援助の提供を申し出て下さった。私達は教会のメンバーではないので、丁寧にそのご好意をお断りしたのだが、それでも援助を申し出て下さった。正直初めての援助の嵐に非常に戸惑っていた。人様から物をこれだけいただくことに慣れてないのだ。しかし行政への支援をいくつ申請しても何故か手続きが受理されずにしたため、実際、どん底の私達を救い出してくれたのはこういった人々の温かい援助だった。

支援と被災者のフラストレーション

被災から間もなくFEMAが緊急避難一時金として「家族」につき二〇〇〇ドルと三ヶ月分の家賃援助として約三三〇〇ドルの手当てを発表した。しかしこの手当てを申請するのがまず大変な作業だった。FEMAの電話受付は二十四時間体制だが、多くの被災者が一斉に登録を試みているようで、二週間に渡ってかき続けたが一度も繋がらなかった。最終的にオンラインでの登録となったが、何故か何度も途中で

フリーズしてしまい登録が完了するまで五、六回作業を繰り返すし行なわなければならない。しかし、これが結果的に「重複登録」となってしまう、手当の支給を大幅に遅らせた原因になってしまった。結局手当てが支給されたのは十月の後半に入ってからだった。被災度合いや家族構成も様々ありながら、支給額が均一されており、これが被災者の大きな不満につながった。成人の「家族」につき支給されるので、例えば自身の単身家族も家族六人の大家族も同じ額が支給された。また、家も仕事も失くし、文字通り「何もかも失くした」被災者から、家も仕事も失わず「元通り」の生活に戻っている「被災者たち」も同様の支援を受けられるため、前者も後者も一斉に申請が殺到する。しかし当然の混雑でなかなか支援が届かない。泊まる場所も行く場所もない被災者は死ぬほど援助が必要なのに、多数の後者の申請がその支援を大幅に遅らせていた。米赤十字でも被災者一人につき三六〇ドル分のクレジットカードの分配を始めたが、受付時間の十五時間以上も前から人々が列を作り、容易に援助を受けられる事がない状態だった。本当の被災者はこのクレジットカードを避難生活に必要な経費や買い物、とても有効に利用したが、一方で「元通り」の生活に戻った人たちにとっては「棚からぼた餅」の支援となった。

一時帰宅 被災から一カ月余り

レイクビューへの一時帰省許可が正式に出たのは十月五日、被災から一カ月以上過ぎてからだった。実際にレイクビューの水抜きが完了したのは九月二十日頃だったが、その後二週間は帰省許可がおりなかった。道路をふさぐ木々の処理や、安全対策を考慮した結果と理解しているが、住民にとっては奪略や浸水と高温多湿によるカビの大量発生によって、回収できるものも時間が経てばできなくなるといった懸念が強かった。一時帰省許可は夜間外出禁止令までには被災宅から私物を回収するためのもので、時刻になれば離れなければならない「look and leave計画」だった。幸い、濁流に飲まれたとの報道は誤報で、我が家は被災前と変わらぬ姿で建っていた。しかし、約三週間に渡って約三〜四メートルの泥水に浸水していた家の中は壊滅的だった。大きな冷蔵庫は傾き、天井についていた扇風機には床に置いてあったコーヒーマシンが引っかかっている。木製の家具はすでに原形を留めておらずぐしゃぐしゃだ。夫の空手着はえりの部分以外は溶けていた。二階も三十センチほど一瞬水が入ったようで、カーベットはきれいだだが床がかなりゆがんでいた。



また家具の下部は全てカビで覆われ腐っていた。浸水しなかった洋服や子供のおもちゃなどもカビで覆われており、頭痛を起すほど強烈な匂いのため、そのほとんどを処分せざるを得なかった。なんとカダンボール箱二、三個分の最低限のものを回収したが、実際匂いの取れないものもあり一部は諦めて捨ててしまった。

復興への願い

被災から三カ月以上経った二月一日、やっとカトリーナとリタで二回浸水したエリア”下第九地区”への一時帰宅許可が出た。レイクビューを含め被災地の約四十%が今も電気が通っておらず、一時帰宅すらしていない家も多い。中には家の中の物を全て取り除き、壁も床もはがし、骨組みだけがむき出しの状態にしてある家もあるが、”再建”なり、修復”の見通しは全くついていない。住宅地の復興計画は未だ公表されておらず、堤防を今後どう修復・強化するのか、そしてそれには一体何年かかるのか、地盤や土台、排水の見直しはどうするのか、果たしてこのコミュニティ自体を再開発するのか等、多くの疑問が未だ闇の中だ。姑夫妻は洪水保険と住宅所有者保険の両方に入っていたが、浸水による被害だったので補償額

の少ない洪水保険が適用された。もし暴風や倒れた木で家にダメージがあれば住宅所有者保険も適用されたそう。残念ながら洪水保険で補償された額は現在の不動産価値の半額以下だった。今後保険の加入には新しい「エレベーション基準」が適用されるそう。最近の報道ではフレッチャークォーターなど”日常”に戻っている町の様子が一般に伝えられるが、実際は想像以上に町のほとんどが壊滅的で住人が戻る場所がない。住宅地を復興させる条件が揃うまで、相当な時間がかかることが素人の私でも感じている。現在ニューオーリンズでは徐々に様々なビジネスが再開し始めたが、どこも人手不足に悩まされている。二十四時間営業だったウォールマートもほとんどが十二時間営業になり、ファーストフードもドラッグストアのみの営業にしているところが多い。冠水した家を清掃する仕事もローカルでは時給八ドルから十二ドルが相場だが、FEMAのコントラクター達は倍以上の時給が約束されており、当然ワーカー達は時給の高いところへ行く。大手ファーストフード店もこれまで最低賃金だったが、半年契約の雇用金として六〇〇ドルとこれまでの倍にあたる時給十二ドルを提示しているところもある。しかしこれらウエイトレスやキャッシャーなど学歴を必要としない

仕事をしていた層は現在も避難中で、賃金が高騰しても働く人が少ないのが現状だ。先日行われた世論調査では被災者の半数がニューオーリンズへは戻らなると答えたそう。私達はできることならニューオーリンズへ戻って一日でも早く日常を取り戻したい。できることなら自分達も復興に努めたい。けれど実際戻って住む場所がない。町の八割が冠水したため、生活できる状態のアパート等はすでに満室か空きがあっても家賃が当初の三倍にまで高騰しているところもある。州外からのワーカーやコントラクター達も宿泊場所がなく、公園などにテントを張ってそこで暮らしながら仕事を続けている。甚大な被害に遭ったエリアには低所得者層のアフ

リカン・アメリカン達の住宅地も多く含まれている。ニューオーリンズジャズ、ブラスバンド、セカンドラインなどユニークな文化・習慣が根付いていたところだ。不動産の高騰でますます彼らが戻る場所がない。また、未だ市内の公立学校はほとんど閉鎖しており、子供たちが通える学校も少ない。復興までの道のりは相当険しいだろうが、独特の文化や人種が入り混じったあの”ガンボスープ”のようなニューオーリンズに戻ってほしいと切に願っている。

文/ニューオーリンズ市公認ガイド・三日月コネクション代表 ロボック美貴

参考資料
ハリケーン・スケール(NOAA)

カテゴリー	風速(マイル/時)	参考(m/s)
1	74-95	33-42
2	96-110	43-49
3	111-130	50-58
4	131-155	59-69
5	156~	70~

注) 風速は1分間平均

ハリケーン・カトリーナの移動経過

日時	概要	備考
8月23日 17:00	東部時間 熱帯低気圧として発生	
24日 11:00	熱帯性暴風・カトリーナと命名	
25日 17:00	ハリケーンに発達	
18:30	フロリダ上陸(カテゴリー1)	
27日 5:00	カテゴリー3	
28日 0:40	中部時間 カテゴリー4	
7:00	カテゴリー5	
10:00		ニューオーリンズ市長が避難命令発出
29日 6:10	ルイジアナ州プラス付近に上陸	
10:00	ミシシッピ州バーリントン付近に上陸	
14:00		市が17番街運河の破壊を公式に確認

(出典: http://en.wikipedia.org/wiki/Timeline_of_Hurricane_Katrina)